

エンドゲーム 大統領最期の日

2007(平成19)年12月24日鑑賞(ユウラク座)

★★★



監督・脚本＝アンディ・チェン／原案・共同脚本＝J・C・ボロック／出演＝キューバ・グッディング Jr. / アンジー・ハーモン／ジェームズ・ウッズ／パトリック・ファビアン／ピーター・グリーン／ジャック・スカリア／アン・アーチャー／デヴィッド・セルビー／バート・レイノルズ（日活配給／2006年アメリカ映画／96分）

第1章

ハリウッド映画もいよいよ変容か？

……「大統領死す！」を売りにしたドラマがまかり通るのだから、アメリカは面白い！ 主人公は、大統領を守りきれなかったシークレット・サービスと女性記者。浮かびあがってきたのは意外にも ISG という政府の諜報機関。それはホント……？ また、その目的は……？ 動機を解明していくと、世紀の大事件も意外と人間的……？

何ともショッキングな……

この映画のタイトルも刺激的だが、チラシの見出しは「大統領死す！」という何ともショッキングなもの。映画冒頭はその見出しどおり、大観衆が見守りパレードに沸く式典の会場で、アメリカ合衆国大統領ハーモン・ハワード（ジャック・スカリア）が、マスコミ関係者になりすました1人の男から拳銃で撃たれるというシーンが登場する。

主人公アレックス・トーマス（キューバ・グッディング Jr.）は大統領とその夫人（アン・アーチャー）の最も身近に付き添うシークレット・サービス。したがって、最初に犯人を発見した彼は、咄嗟に身体を張って大統領を守ろうとしたが、自分の左手をかすめた銃弾が大統領の頭部を直撃したから、たまらない。犯人はその場ですぐに射殺されたが、緊急ヘリで病院に運ばれた大統領は残念な結果に。

大統領が遠くからライフルで狙撃されるという可能性は常にあるが、嚴重な警備をいかくぐり、拳銃を持った犯人が大統領の目の前に飛び出してきて発砲するというのは前代未聞のこと。一体大統領の警備はどうなってるんだという声が沸きおこって当

然だが、少なくとも身体を張って大統領を守ろうとしたトーマスに職務怠慢がなかったことはたしか。その点は上司のボーン・スティーヴンス（ジェームズ・ウッズ）も保証したが、やはりトーマスはしばらく休職のやむなきに……。

女性記者の取材能力は……？

この映画のもう1人の主人公は女性記者のケイト・クロフォード（アンジー・ハーモン）。日本では今、週刊誌やテレビ局の芸能記者はともかく、新聞記者は「ぶらさがり取材」や「記者クラブ制度」が確立する中、一元的に流される情報をそのまま伝えるだけで、独自の視点による独自の取材ができなくなっているのが実情。しかし、ケイトの取材能力はすごい。

「現場100回」の鉄則どおり、ケイトは現場で知り合ったある浮浪者から共犯の存在を嗅ぎつけ、射殺された犯人ルイス・デティモアの母親と妹に接触することにも成功。そこでケイトは、大統領とその夫人の最も身近にいたトーマスにその情報を伝え、さらに犯人像を絞っていくべく、休職中のトーマスの自宅を訪れることに。その行動力はさすが、新聞等の印刷報道、文学、作曲に与えられるアメリカで最も権威ある賞であるピューリッツァー賞を狙っているだけのことはあると感心させられるもの。しかし実は、彼女の行動はある男たちがすべてキャッチし、その足どりをフォローしていたからヤバイ。

したがって、浮浪者の死亡もデティモアの母親と妹の住む家の爆破も、すべてこの男たちからのケイトに対する「これ以上の追及はやめろ」という警告だったのだが、あくまで前向きなケイトにはそれは通用しなかったよう。そこで男たちは、一気にケイトとトーマスの2人をまとめて始末するべく、あるところに爆破装置を仕掛け2人の暗殺を狙ったが……。

黒幕はアレクシス・インターナショナル社……？

ケイトの動きをチェックしていた男たちは謎の企業アレクシス・インターナショナル社。そして、その責任者はフィリップ・キーファー（ピーター・グリーン）という男。爆破攻撃をわずかに逃れ、銃を持つ男たちをやっつけたトーマスは、直ちに上司のステューヴンスにこの状況を報告し、アレクシス・インターナショナル社の搜索を提言したが、なぜかステューヴンスは「2日間だけ待て」と指示。しかもトーマスに

対して、「その間は絶対に動くな」との厳命が下ることに……。

しかし、そりゃどこかヘン……？ そう感じたトーマスは、同僚のブライアン・マーチン（パトリック・ファビアン）と共に武装チームを編成し、アレクシス・インターナショナル社を急襲。意外に早い対応にキーファーは驚いたが、その対策は万全……？ すなわち、突入チームとの激しい銃撃戦の後、セットされた爆弾で突入チームはすべて飛び散り、キーファーだけは車で脱出という思惑だった。

しかし、ここでも間一髪爆弾の危機を逃れたトーマスがキーファーの後を追ってきたから、激しいカーチェイスが展開されることに。このカーチェイスは迫力満点。いったんは諦めざるをえなかったトーマスだったが、何が何でも捕まえてやるとの執念に燃えるトーマスの何とも無茶苦茶な体あたり戦法によって、遂に車を大破させられ重傷を負ったキーファーは病院に運び込まれることに。意識を回復したキーファーに自白させれば真相相明は一気に……。その可能性も考えられたが、どうもスティーヴンスの態度や動きが気がかり……？



CIA、FBI、そして ISG……？

アメリカには CIA（アメリカ中央情報局）と FBI（連邦捜査局）という2つの諜報機関があることは有名だが、ISG というのはこの映画ではじめて聞く名前。これは、CIA の機密機関で研究情報部とのこと。

キーファーの写真をもったトーマスとケイトは、大統領の友人でもあったモンゴメリー将軍（パート・レイノルズ）の山荘を訪れ、キーファーについての情報を求めた。すると、キーファーのホントの名前はジャック・ボールドウィンであり、そしてジャック・ボールドウィンは ISG の副部長だったとのこと。しかもトーマスが「その上司の部長は？」と尋ねると、モンゴメリー将軍はそれはスティーヴンスだと答えたからトーマスはビックリ。すると、大統領暗殺の黒幕は政府の諜報機関……？ そんなバカな……？ もしそうだとしたら、その狙いは……？



スティーヴンスに女のカゲが……

大阪府知事選挙への立候補を表明した弁護士兼タレントの橋下徹氏は、「自分が必ずしも品行方正とはいえない」と最初から予防線を張っていたが、諜報機関で働く人々が必ずしも品行方正とは限らないのは当然。そこで何となく気にかかるのが、ト

ーマスの上司のステイーヴンスだが、彼にはどうも妻以外の女のカゲがチラホラと……。もっとも、そんな情報はトーマスよりもマーチンの方がよく知っているようだった……。。

それはともかく、ステイーヴンスは週末の妻がいない時は、自宅に女を招き入れてのお楽しみが多いと聞いたトーマスは、ステイーヴンスとボールドウィンとの関係を確認するべく、マーチンと共にステイーヴンスの自宅へ向かうことに。さて、そこでトーマスとマーチンが見たものは……？

バッテリー切れにご用心！

最近はやケータイなしに取材や捜査が進まない。したがって、トーマスもケイトも頻繁にケータイを使っているのは当然。そこで時々起きるトラブルが、ケータイのバッテリー切れだ。もっとも、私たちと違ってケータイでの情報伝達を最優先にするトーマスやケイトが、肝心な時にバッテリー切れになるというのは職務怠慢と言われても仕方ないところ……。？

トーマスがステイーヴンス宅へ向かっている間に、ケイトはそれまでの取材を記事にまとめて社に送ろうとしたのだが、間の悪いことにこの時点でケイトのケータイのバッテリーがヤバくなったらしい。予備電池くらい持つとけヨ、と私などはすぐに思ってしまうのだが、まあ、これはスリリングなストーリーを組み立てるための1つのテクニックだから仕方ない……。

自宅でステイーヴンスが死亡していることを確認し、他方、意識不明で病院に収容されていたはずのボールドウィンが脱出したとの連絡を受けたトーマスは、直ちにケータイでケイトに危険を伝えようとしたのだが、あいにくそんな時にケイトのケータイはバッテリー切れ。こりゃやばい……。

ファースト・レディの悲しみは……？

1963年11月22日にダラスで遊説中に暗殺されたジョン・F・ケネディの夫人ジャクリーヌが、その後1968年10月20日ギリシャの海運王アリストテレス・オナシスと結婚したことは世界的に有名な話。しかし、そこに至るまでの2人の子供と残されたジャクリーヌ夫人の悲しみぶりは全米に報道され、ケネディファンの涙を誘ったもの。

ところが、この映画においてハワード大統領夫人はほとんど涙を見せていない。そ

れは、悲しみを押し殺し、気丈に振る舞っているためと評価されていたが、どこか不自然な感も……？ 忠実なシークレット・サービスであったトーマスは、暗殺犯究明のメドが立つまでは大統領夫人に会うつもりはなかったよう。しかし、今やっとボールドウィンとの対決にケリがついたトーマスが大統領夫人を訪れると、彼女は絵を描いており、既に心の痛手からかなり立ち直った様子。もっとも、私の目には立ち直りがあまりにも早いようにも見えたが、それは私だけ……？

大統領夫人から絵の感想を求められたトーマスは「美しい絵です」と適当に誉めていた(?)が、そこで大統領夫人は「あまり近くにいと、見えるものも見えないものだ」と述べ、トーマスを最も鑑賞しやすい位置に導くと、たしかにその絵の印象は全然違うものに……。ここらあたりの含蓄ある言葉のやりとりをしっかりと味わうことが、この映画を理解するためには不可欠……？

「常識を打ち破る驚愕の結末」とは……？

この映画の原案・共同脚本をしたJ・C・ポロックは、15年間CIAに在籍してため政府機関の内幕や軍事機密、そして戦術や兵器の描写がリアルだという点で世界中を沸かせてきた人気作家とのこと。この映画のストーリー展開をみていると、大統領暗殺の実行犯デティモアに共犯がいたこと、その黒幕がフィリップ・キーファー＝ジャック・ボールドウィンであることはすぐに明らかになるが、ボールドウィンとその元上司であったスティーヴンスとの関係はさすがにスナナリとは見せてくれない。さらに、その黒幕の背後にいるものが誰であるのかについては当然チラホラとしか提示されないから、最大の問題は、大統領暗殺の動機。つまり、この動機がこの映画最大のポイントだ。

プレスシートのうたい文句は、「大統領暗殺というセンセーショナルなオープニングから常識を打ち破る驚愕の結末へと突き進む」というもの。そこでさて、「驚愕の結末」とは一体どんなものなのか……？ それに十分注目する必要がある。ちなみに、その点についての私の感想は、「動機を解明していくと、世紀の大事件も意外と人間的」というものだが……。

名作の仲間入りは……？

1979年の朴正熙（パク・チョンヒ）大統領の暗殺事件を大胆な視点から描いたイ

ム・サンス監督の『ユゴ 大統領有故』(06年)はすごい映画だったが、ケネディ大統領暗殺を描いた名作は『JFK』(91年)、『ダラスの暑い日』(73年)などたくさんある。また、『ボディガード』(92年)もすばらしい映画だった。この映画のプレスシートには「アメリカ映画が描いてきた大統領への凶弾。」という見出しでそんな名作の紹介がたくさんあるから、是非参照してもらいたいもの。

そこでさて、この『エンドゲーム 大統領最期の日』はそんな大統領暗殺を描いた名作の1つとして歴史に残ることができるだろうか……？ そうなるためには、この映画が狙う「常識を打ち破る驚愕の結末」にあなたがどの程度納得できるかにかかっている、と私は思っているが……。

2007(平成19)年12月25日記

ミニコラム

歴史を変える暗殺も？

宮崎あおいの好感度によって(?)視聴率好調のNHK大河ドラマ『篤姫』では、近々「桜田門外の変」が放映されるはず。そこで私が思い出したのは、12の短編からなる連作小説『幕末』。ここで司馬遼太郎が取りあげたテーマは暗殺だ。『シネマルーム18』に収録した暗殺映画に限らず、日本でも幕末から明治維新にかけて、坂本龍馬、中岡慎太郎そして伊藤博文、大久保利通ら多くのヒーローが暗殺された。

彦根藩出身の大老井伊直弼は勅許のないまま独断で安政の五カ国条約を締結したり、「安政の大獄」によって反対派への弾圧を強めたため、その反発は大。水戸藩と薩摩藩の過激派がクーデター計画を練ったが、結局薩摩藩は自重。そこで17名の水戸藩士と薩摩藩

士有村次左衛門らが、安政7(1860)年3月3日に決行したのが「桜田門外の変」だ。井伊直弼の暗殺によって幕府の権威は失墜し、朝廷と薩摩・長州の政治活動が活発となり、尊皇攘夷運動に弾みをつけることに。それが、以降の薩長連合から倒幕の動きにつながっていくわけだ。そう考えると、「暗殺は歴史に寄与するのか？」というテーマは興味深い。

もちろん、司馬氏は暗殺には否定的で「人の風上にも置けぬ」としている。しかし、唯一「桜田門外の変」だけは例外的に「日本の歴史を変えた暗殺」であったと評価している。さてそのココロは……？

2008(平成20)年6月19日